

宇喜多氏 梟雄説と天道説

丸谷憲二

1 はじめに

柴田一氏は、「長い間、秀家公は岡山県民から忘れられていたことになる。若くして文禄の役の総大将を務め、その功によって権中納言に進み、豊臣家五大老の一人になった。この全国版の秀家公が地元岡山県民に忘れ去られていたのはなぜか。理由は簡単。秀家公の器量を不当に低く評価していたためである。」と説明している。

宇喜多氏に梟雄説がある。村上岳氏（瀬戸内市教育委員会）は、「宇喜多直家に対する梟雄イメージの形成は、江戸時代初期に刊行された『太閤記』（小瀬甫庵著、1624年初版、豊臣秀吉の一代記）の影響が大きいと考えられる。その後岡山で編纂された地誌、軍記類もその影響を受けている。」と説明される。

梟雄（きょうゆう）説の根拠は、戦国時代の武将の生き様として 50 歩 100 歩と考える。2014 年 NHK 大河ドラマ「黒田官兵衛」の時代考証をつとめた小和田哲男氏（静岡大学名誉教授・日本中世史・戦国時代史）も梟雄説である。しかし、梟雄説は明確な間違いである。

2 宇喜多氏「天道説」

加賀前田家の評価は「宇喜多氏天道説」である。宇喜多秀家が前田利家の 4 女・豪姫(1574～1634)と結婚したのは 1589 年(天正 17 年)である。前田利家が父親として梟雄と娘を結婚させるはずがない。

前田家に残されている宇喜多家文書は「宇喜多氏天道説」である。記録を確認したい。前田家は前田利長を批判した宇喜多秀家の「天道説」を評価している。

2.1 久福様御遺訓の「天道人倫五常の道」

『宇喜多家旧記 単』に「久福様御遺訓」が記載されている。久福様とは宇喜多秀家である。「久福様御遺訓」は宇喜多秀家の思考を見ることができる唯一の貴重な史料である。宇喜多秀家の思考は「天道人倫五常の道」である。岡山県には「宇喜多氏梟雄説」を信じている人が多い。加賀前田家が評価している「天道人倫五常の道」を天道説として紹介したい。戦国時代の武将の価値観としては異質である。

久福様御遺訓

先祖高德公ハ文武の御徳を備へ候故ニ、末代の今日迄芳

名洽く知られ玉ひ、人々其徳義をうらやみしたひ申さ、
 る者無之候、我苟も其純孫ニして赫々の將印を佩ひ候と
 いへども、是皆先祖の余栄ニあらざる事なし、併しなが
 ら我又先祖の掟て庭訓ニ違ひ背かざる御蔭なり、又慈父
 直家公ハ能く先祖の業を輝かし、名を成し給ひけり、今
 我ニ至て見るかげもなき有様也、如何ニもして先祖ニ申
 訳候べし、然れども天道の所回は人の欲の叶ふところに
 あらず、我不肖といへども只道のある処をただして心ニ
 合ハん事を知る、夷齋鮑焦か義行も踏高く人臣の義行を
 バ劣らまじやと思ふ一念より利欲を省みず終ニ家を亡す
 ニ至り候とも、誠亦以本望の至り、□らの極めなり、夫
 れ人の貴としとする処のものハ、金銀財宝ニあらず、高
 位高官ニもあらず、天道ニ悖らず、人の道ニ従ふをとふ
 とみ候、君臣・父子・夫婦・兄弟・朋友之交りを能す、
 是を人の道といふ、是を天道人倫五常の道といふ、此道
 に心を寄せ、如何なる困窮ニ艱難ニ逢ふとも心ろより
 離さゝるときハ、身安楽ニ心ろ乱れず、心ろ乱れざると

きハ善道を思ひ先祖を辱かしむる事なし、善道ある人を
ハ人々敬ひとふとまれ、人の上ニ居仰かれずといふ事な
し、先祖を辱かしめざる者ハ孝といふ、孝は教への始め、
善道の本とかや、又四恩の内ニハ主恩ハ尊とく、死ニ亡
びずんバ報ひ果さる事なし、故に主に事るときハ、其身
を惜まず、いかなる艱難危ふきニ臨むとも、我身ありと
思ハす、若し利徳あるときハ主の為のみ求め、己れの
為ニ求むべからず、主の過ちもあるときハ、己れ代て受
けべきなれば、過ちなからしむる様兼々心ろ掛け候事又
第一なり、家に居るときハ主の為めニ善事を計らひ候て
心ろ閑断あるへからず

己れが身は父母より受けたる者なり、故ニ父母死行とき
は、共ニ死ニ行とも惜むへき事あるべからず、さらば孝
養の為ニハ身命をも惜まず如何ニもして両親の心ろニ叶
ふ様心ろを注ぎ、仰せもあらバ、聊かも猶予あるべから
ず、父母ハ常ニ我子孫を庇ひ善き道をもならハせ、うま
き物をも食ハせ、美麗な衣服を着得させ度思ひ、我身よ

3 なぜ、前田家は長期間に渡り宇喜多氏を世話したのか

3.1 宇喜多秀家と前田利家の娘豪姫との結婚

宇喜多秀家は、1589年(天正17年)に前田利家の女豪姫(1574～1634)を正室に迎えている。秀家17歳、豪姫15歳で結婚し二男一女をもうけた。関ヶ原合戦で敗れた秀家は息子とともに1606年八丈島に配流となった。秀家35歳、在島50年、1655年84歳で死去。豪姫は娘を連れて実家に身を寄せ、夫と息子を案じつつ金沢で生涯を閉じた。敬虔なキリシタンであった。

3.2 前田家の八丈島への仕送り

兼松久和氏(亀山城保存会代表世話人)は、「この援助は敬虔なキリシタンであった奥方豪姫が、棄教と引き換えに兄利長に懇願し幕府の許可を取り付けたものである。前田家3代藩主常長はこの遺志を受け継ぎ、明治維新後に赦免されるまでおよそ270年間続けられたのである。」と報告している。しかし、資料による確認はとれない兼松久和説である。

高山友禅氏(宇喜多同族会事務局長)は、「豪姫の入信は秀家を八丈に見送った後のことである。キリシタン名はマルガリータである。前田家にもキリシタンが多く、豪姫に終始付き添ったのがヨハネこと宇喜多源三兵衛である。」と報告している。

3.3 前田家の記録 『八丈島贈物紀』

加賀三代藩主利常は、八丈島への仕送りを幕府に申し出、一年おきに米70俵、金子35両のほか、衣類、雑貨、医薬品を1870年(明治3年)の赦免まで届けた。赦免時に前田家下屋敷の地二万坪を与え、七戸の長屋を作り炊飯全般の面倒を見ている。何故、八丈島への仕送りを幕府に申し出たのかが、前田家文書「八丈島贈物紀」に記録されている。

「八丈島贈物紀」は明治4年12月に森田良見誌とあり、末尾に「凡二百五十年間彼恩賜テ請テ徒食セシハ、旧藩前田家ノ恩賜ト雖共、・・・然ルニ吾旧藩士及ヒ士・庶民等知ルモノナク明治維新ニ付、八丈島ノ浮田家族悉ク免セラレ召返サレタルヲ不審スル者多キ故ニ、諸記録ヲ勘考シテ倉卒ニ記載シテ一冊子トハナシヌ」と説明している。

『八丈島贈物記』は、前半で八丈島の宇喜多家一統への贈物が始められたいきさつが記されている。その発端を要約すると、まず室鳩巢が著した『駿台雑話』を参照した旨記して次のように説明している。それは、宇喜多秀家と豪姫の間に生れた次男の乳母「さし」が、三歳の息子を豪姫に託し八丈島へ渡海することから始まる。金沢の豪姫のもとでその子供が成長し、沢橋兵太夫と名乗るが、脱藩して伊豆や江戸へ行き、八丈の母のもとへの渡海を求めて筆訴し、その取調の中で彼の渡海は許可されないが、金沢藩による宇喜多家一統への贈物が許可され、兵太夫も金沢藩士に復帰したというのである。この沢橋兵太夫を後ろで支えていたのが豪姫のようである。例えば「常珍（兵太夫）十五ヶ年全く豆州・武州に暮せし間ハ備前上様（豪姫）より金銀を給わりてけり」と記されていることから明らかである。後に兵太夫は渡海の真の目的は「秀家卿を島より盗みだして天下を覆さんと思ひしかとも不叶」と語っているが、これは兵太夫が歳を取ってからのお咄ではなからうか。

前田家文書「八丈島贈物記」抜粋

ざるときハ善道思ひ、先祖を辱かしむる事なし」といい切っている。つぎの「宇喜多家旧記」では関ヶ原合戦にふれ「前田利長始め、細川忠興、京極、蜂須賀の輩、東国に目ほしきもの共、孰れか太閤の恩薄しとせんや、皆天地にあまる重恩を受ぬる事、我と聊か異なる処なし、・・・我傲を出し御味方せらるゝ様に勧めし時、時刻を移さず、取物も取あへず馳せ参るべしと思ひしに、家康にくみし敵対候事思ひかけなき心得なりぬ、せめては福島太右衛門か計らひにも同じ心得なりしと思ひしに、其かりの義理立さへもなかりしものかな」と回顧し、彼等こそ「天道」に背いた「大逆の輩」と批判している。久福が八丈島で悠々と生涯を過ごしたのも、こうした「天道」にそった自分の動向を確信していたからであろう。辞世の句は「三菩提の種を植けんこの寺へミとりの松のあらぬ限りは」と記され、次いで秀家の長男秀高の系譜が載せられている。

「宇喜多家旧記」抜粋

4 まとめ

岡山県には纏まった宇喜多家資料はない。金沢市立玉川図書館「加越能文庫」に多数の宇喜多家文書が含まれている。岡山にあつた宇喜多家記録が金沢藩の今枝氏のもとで次々と筆写され、金沢で保存されてきた。前田家は前田利長を批判した宇喜多秀家の「天道人倫五常の道」を評価している。「秀家の人物評価が末裔への八丈島への仕送りとして、1870年（明治3年）の赦免まで続けられた。」と報告する。

参考文献

- 1 「備作之史料(五)」『金沢の宇喜多家史料』平成8年 備作史料研究会
- 2 金沢市立玉川図書館「加越能文庫」 <http://jmapps.ne.jp/amhr/>

宇喜多直家軍記 宇喜多略伝 浦上宇喜多両家記
 宇喜多家一件 宇喜多家旧記四種 宇喜多秀家土帳